

21	西尾	西尾市立平坂中学校	サカキバラ マサタカ	
			氏名	榑原 正隆

分科会番号	2	分科会名	外国語教育
-------	---	------	-------

研究主題

言語の働きを理解し、適切な表現を選択してコミュニケーションを図ろうとする生徒の育成
～目的・場面・状況を意識した話し合いを通して～

1 主題設定の理由

本学級の生徒は、英語の学習に前向きであり、話すこと（やり取り）に積極的に取り組むことができる。毎授業の最初に行われる Small Talk では、1年生の頃から帯活動として毎時間行ってきたこともあり、会話を切ってしまうことなく、1分～2分程度やり取りを続けることができる。リアクションの表現を取り入れて会話をつなごうとする意欲については、好評に値する。Unit2では、市内イチョシのご当地グルメをALTに紹介するために、食べ物の魅力やおすすめの食べ方など、伝えたい情報を整理してよりよい英文になるように話し合う姿が多く見られた。一方で、「I like～と My favorite～は同じだからどっちでもいいよ」や○○ is delicious.という表現が繰り返されたりして、英文としては正しくても、生徒たちが伝えたいと思っているニュアンスで相手に伝わっていない様子がうかがえた。

グローバル化が急速に進み、翻訳機やAIが発展している現代、日本語を英語に訳すことは必ずしも人間でなくてもできる時代になってきている。しかし、本来言葉によるコミュニケーションというものは、発信者の思いを受信者に届けるためにあるものである。日本語を英語に訳す力だけではなく、その言葉でどんな思いが相手に伝わるか、また、その言葉で相手がどんな気持ちになるかを考えて発信する力こそ、今の教育に必要なことだと考える。

生徒の実態を踏まえて、本単位では、日本の学校生活について外国にルーツをもつ生徒（以下：外国籍の生徒）に伝えることを題材に、英文の働きを理解し、相手の立場に立って英文を考えるように授業を構築していく。日本と外国の学校生活の違いを知り、これからも転校してくるであろう外国籍の生徒のために日本の生徒ができることを考え、学級で話し合ったことを実行していく。（本学級では、ルールブックを作成することとなった。）言語材料として、have to と must という、どちらも「～しなければならない」と訳すことが多い2つの表現は、英語のニュアンスの違いについて考えるのにふさわしい題材である。また、本学級には外国籍の生徒が4名おり、そのうち2名は、2年生4月の時点で日本の学校に通学している期間が半年以下であり、まだ学校生活に慣れていないことも多い。実際に外国籍の生徒が経験した困り感を当該生徒の言葉で聞き、必要感を感じられるようにする。そのうえで、have to や must などの助動詞に焦点をあて、英文のニュアンスを捉えて相手の立場や状況に合った言い方が英語でできるようにする。

こうした実践を通して、生徒が言語の働きを理解して、目的・場面・状況を捉えた上で適切な表現を選択できるようになると考えた。以上のことを踏まえ、「言語の働きを理解し、適切な表現を選択してコミュニケーションを図ろうとする生徒の育成～目的・場面・状況を意識した話し合いを通して～」と研究主題を設定し、実践を行った。

2 抽出生 A の実態と目ざす生徒像

(1) 抽出生 A について

抽出生 A は学習に対する意欲が高く、忠実に日本語を英語に訳そうとする生徒である。日本語を意識するあまり、1 年生時は be 動詞と一般動詞が混在してしまったり、「彼は～したいと思っている」を英訳した時に、He wants to～ではなく He thinks that he wants to～と書いたりしたことがあった。日本語に忠実に学習に励む抽出生 A は「～しなければならない」という日本語で、have to と must の 2 つの表現があることで、混乱することが予想される。本単元を通して、日本語を介してだけでなく、伝えたい思いやニュアンスを理解して、英語での表現を楽しむことができる生徒に育てたい。

(2) 目ざす生徒像

生徒の実態を踏まえて、目ざす生徒像を以下のように定めた。

have to と must のニュアンスの違いを理解し、相手の立場や状況を考え、意図をもって表現を選択できる生徒

3 研究の仮説と手立て

目ざす生徒像に迫るために、以下のように研究の仮説を立てるとともに、具体的な手立てを講じて本実践を進めていく。

仮説 1 導入で日本と外国の学校生活の違いを知り、日本に来る外国籍の生徒がどんなことに困るのかを話し合うことで、単元を貫く課題を見出すことができるだろう。

手立て 1 日本と外国の学校生活の違いを知るクイズ

制服や給食、清掃の有無や登下校の方法など、日本と外国の学校生活の違いをクイズ形式で行うことで、「もっと知りたい」「外国籍の子のために考えたい」という意欲をもてるようにする。

手立て 2 外国籍の生徒が困ると思われることを話し合う

外国籍の生徒が困りそうなことを話し合ったり、学級の外国籍の生徒の話を聞いたりすることで、自分たち日本人の生徒がしてあげられることを切実感をもって考えられるようにする。

仮説 2 平坂中のルールブックを作成する際に、生徒が提案した表現を比較してニュアンスの違いを考えることで、場面や状況を考えて表現を選択するだろう。

手立て 3 2 つの英文を比較する

have to と must を使った文が混在することが予想されるので、さまざまな英文で比較し、場面や状況をイメージして適切な表現を選ぶ。

仮説 3 外国籍の生徒に実際に伝える場を設定することで、学習を振り返り、次の英語学習につながられるだろう。

手立て 4 作成したルールブックを GC の生徒に届ける

ルールブックを外国籍生徒の日本語学習教室 (GC) に届けて見せ、感想をもらい、今後もニュアンスの違いに着目して学習に励む意欲を育てる。

3 研究の実践と考察

目ざす生徒像に迫るために手立てを講じ、抽出生 A の変容を追っていく。

(1) 仮説 1 導入で日本と外国の学校生活の違いを知り、日本に来る外国籍の生徒がどんなことに困るのかを話し合うことで、単元を貫く課題を見出すことができるだろう。

手立て① 日本と外国の学校生活の違いを知るクイズ

単元の導入で、日本とアメリカの学校生活の違いを、資料 1 のようなワークシートでクイズを行った。生徒たちは、ペアと相談をしながら興味をもってクイズに取り組んでいた。正解を伝えると、驚きの声と共に「いいなあ、アメリカの学校に行ってみたいな」「掃除も宿題もやっている自分たち、優秀じゃん」のような声が自然と飛び交っていた。そこで、「逆にアメリカの生徒が日本の学校に来たらどう感じると思う？」と尋ねると、「ルールとか厳しく感じるんじゃないかな」「やることがたくさんあって大変に感じると思う」など、日本の学校生活への大変さや不安を感じる事が予想される声があがった。アメリカだけではなく、自分が気になる国の学校生活について調べる時間をとると、生徒たちは複数の国を次々に調べていた。抽出生 A も、複数の国について調べており、単元に興味をもった様子だった。学級全体として、日本と外国の学校生活の違いについてもっと知りたいという意欲をもつことができた。

日本とアメリカ、学校生活どう違う！?
2年()組()番()

○日本と同じ ×日本とは違う

1) Students wear school uniform.	
2) Students come to school on foot.	
3) Students take off their shoes when they enter school.	
4) Students eat snacks at school.	
5) Students eat school lunch.	
6) Students can't use their smartphone at school.	
7) Students clean their classrooms.	
8) Students do their homework during summer vacation.	
9) Students can't wear make-up. *make-up メイク	
10) Students start their new year in April.	

資料 1 クイズ

手立て② 外国籍の生徒が困ると思われることを話し合う

日本と外国の学校生活が大きく異なることに気づいた生徒たちに、「外国籍の生徒が日本の学校に来た時に、困ることは具体的にどんなことだと思いますか？」と問いを投げかけた。掃除の有無や宿題の有無、登下校の方法など、資料 1 のクイズに出てきた内容について、意見を述べる生徒が多かった。「その子たちのために、私たち日本の生徒ができることは何でしょうか？」と問うと、「1つ1つ寄り添って教えてあげること」「靴を脱ぐことは昇降口に掲示をするなど、その場で気を付けるべきことをそれぞれの場所に掲示する」「ルールを紙に書いて説明してあげる」など、多様な意見が出た。どの意見も外国籍の生徒の立場に立って考える姿勢が感じられる意見であった。抽出生 A は、資料 2 のように、寄り添って教えながら生活することと、紙に書きだしてルールを教えることを意見としてあげていた。

②外国から生徒が転校してくるとき、困ることは何だろう？
その子たちのために、私たち日本の生徒ができることは何だろう？

アメリカとそういえば筆者さんがいるからアメリカの人は自分たち
がやっていたことがないから、それを自分たちでやるのは
とても大変だと思うから、どうやってそれを教えてあげようか、簡単なもの
から教えてあげよう。その子の文化がわからないものは
かみとか書いておいてあげようか、それもいいかもしれない。

資料 2 抽出生 A の意見

本学級の外国籍の生徒に、日本に転校してきた時に実際に不安に感じたり、困ったりしたことはどんなことだったかを学級に話してもらった。フィリピン国籍の生徒は「困ったことではないけれど、フィリピンの自分の学校では給食がなかったので、日本で給食が毎日出て、どんな給食が出るか楽しみになった」と、いい点を述べた。もう一人のフィリピン国籍の生徒は「掃除をすること」と述べた。共に学ぶ生徒が実際に経験したことや感じたことを聞くことで、日本の生徒たちも興味をもって話を聞いており、外国籍の生徒のために何かしたいという気持ちが高まっていた。

(2) 仮説2 平坂中のルールブックを作成する際に、生徒が提案した表現を比較してニュアンスの違いを考えることで、場面や状況を考えて表現を選択するだろう。

手立て③ 2つの英文を比較する

生徒たちは、Unit4 でホームステイの学習をし、外国で生活するときに気を付けるべきことや難しさなどについて考えた。そのうえで、外国籍の生徒が平坂中に転校してきた際に教えてあげたい学校のルールについて、各自で考えてきた英文をグループで共有し、グループで選んだ2文を画用紙に記入して(資料3)、全体に共有した。さまざまな内容が生徒からあげられたが、内容は同じなのに have to と must それぞれ別の助動詞を使った英文がいくつか見られた。

- ① We have to clean our classroom. / We must clean our classroom.
- ② We have to do our homework. / We must do our homework.
- ③ We have to come to school by eight. / We must come to school by eight.

最初に、must を使って表現したグループに、have to ではなく must を使った理由があるか尋ねたところ、「特にない。しいて言うなら短いから。」「なんとなく最初に must が頭によぎったから。」と答えた。そこで、資料4のように、2つの英文とよく使われる場面を紹介し、それぞれがどんなニュアンスで使われる表現なのかを考えさせた。以下は、各例文を挙げたときの、学級全体の意見と抽出生Aの意見である。

	学級全体の意見 have to / must	抽出生Aの意見
do your homework	大勢に言うもの/注意する 怒っている/怒っていない 「やってきてね」/「やれ」	must よりも have to の方が 優しい感じがする
go to the dentist	必要性の違い それほど強くない/強い いつでもいい/緊急	(考えがまとまらず)
study English hard	いつでもいいからやりましょう/今やりなさい 今も頑張っている人に/今全然頑張っていない人に	have to の方が優しくて、 must は英語の勉強をしない 人にやれという印象
come to school by eight	ルールを説明するとき/いつもギリギリに登校する人に	校則を言うときは have to 遅刻した人には must

このように学級での意見交流を通して(資料5)、have to と must で使う場面や話す人の意図が異なることに気づいた様子だった。それは、話し合いを重ねるごとに意見交流が盛んになる姿から明らかであった。最後に、実際にイギリスのジョンソン首相が



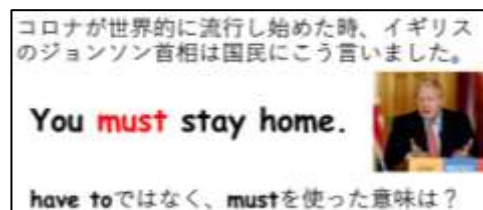
資料3 英文を考える生徒たち



資料4 比較した2つの英文



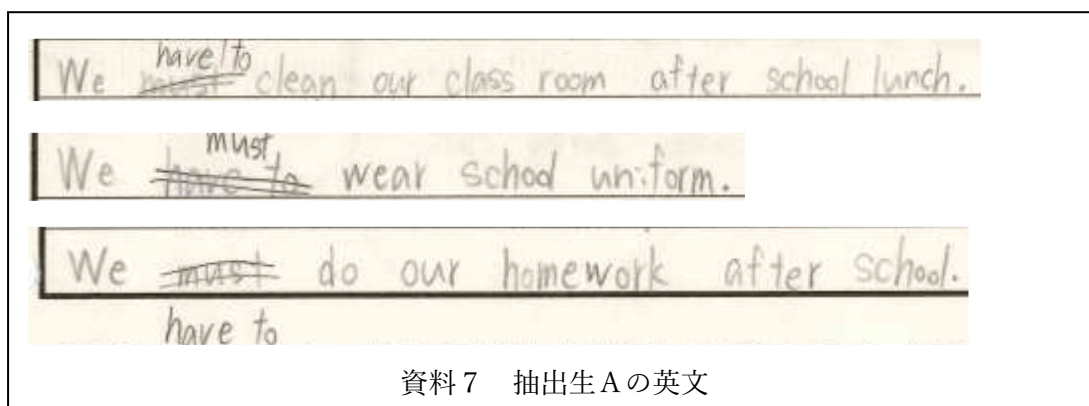
資料5 意見交流



資料6 意図を考える例文

新型コロナウイルスが流行し始めたときに英語で国民に発信した言葉（資料6）の意図を考えさせた。抽出生Aは「危険だからあえて must を使ったと思う。have to だと規則的に家にいてねという説明になるけど、must を使うと今は危険だから家から出てほしくないという思いも強く伝わると思う。」と発言をした。この発言から、have to と must の使用場面や状況をイメージできるようになったと考えられる。

再度、各グループで話し合いを行うと、have to か must のどちらを使うべきか、相手の状況や意図を相談しながら表現を選択する姿がすべてのグループで見られた。以下は、抽出生Aの話し合い前と後のワークシートの英文で変化があった英文である。



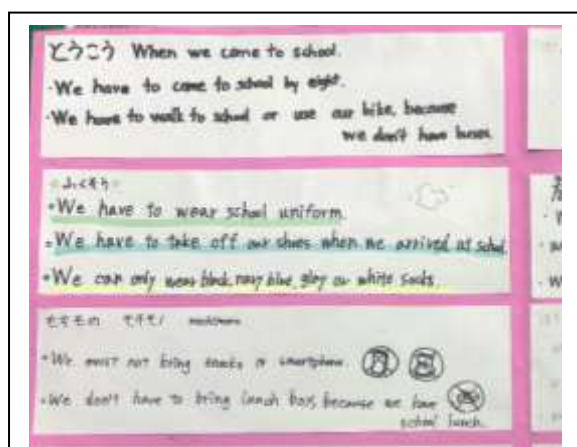
資料7 抽出生Aの英文

We have to wear school uniform.から We must wear school uniform.に変えた意図を机間指導の際に尋ねると、「もし制服を着て来ないことがあったら must だけど、最初の説明は have to の方がいいかな。」とグループで相談をしていた。結果的にこのグループでは must を使った表現で授業を終えたが、意図によって表現を選ぶ必要があることは理解できている様子だった。

（3）仮説3 外国籍の生徒に実際に伝える場を設定することで、学習を振り返り、次の英語学習につながられるだろう。

手立て④ 作成したルールブックをG C（グローバルクラス：日本語指導教室）の生徒に届ける

学級で場面別に役割分担をし、完成した英文を集めたルールブックを作成した。できあがったルールブックを、本学級に在籍する外国籍の生徒がG C教室に持っていき、G Cに通う他の生徒に見せた。以下は、学級で作成したルールブックとG Cに通う2人の生徒からのメッセージである。



資料8 学級で作成したルールブック

生徒①

初めて日本の学校に来たときは、制服を着ることや何時までに登校するのか、廊下で走っていいのかなど、よくわからなくて毎日緊張していました。不安で先生や友達に何度も聞いてしまいました。でもこのルールブックは情報が多くてわかりやすいです。学校のルールが分かって安心だし、「歓迎されている」と感じてうれしいです。

生徒②

このルールブックは英語で書かれているので、外国から来た子にとってとてもわかりやすく、安心できます。英語で短く、でもたくさんの情報を丁寧に説明してくれているので、歓迎する気持ちが感じられてうれしいです。

G Cに通う生徒からの感想を本学級の生徒に伝え、抽出生Aに話を聞くと、「ちゃんと伝わってよかった。これから外国からくる子たちのためにもずっととおいてください。」と発言した。

ルールブックを実際にG Cに通う生徒に見せ、感想をもらえたことで、英語で伝えることができた喜びとともに、目的・場面・意識をした表現の選択の必要性を感じることができたと考えられる。それは、次単元での生徒の姿に表れた。「Scene4 Real Life English ホームステイのお礼状—手紙—」の単元で、be able to という表現を学習した際に、学級から「be able to と can はどう違うんだろう？」という声があがっていた。日本語に訳すと「～できる」となる2つの表現の違いを例文を通して考えると、特にお題を与えなくても、ペアで違いを意識しながらやり取りをしていた。言葉のニュアンスを理解することで、「伝えてみたい」という思いが自然と湧き、学習意欲が向上していることが感じられる姿であった。

4 仮説の検証と課題

(1) 仮説の検証

仮説1 導入で日本と外国の学校生活の違いを知り、日本に来る外国籍の生徒がどんなことに困るのかを話し合うことで、単元を貫く課題を見出すことができるだろう。

資料1のように、外国籍の生徒のために「～したい」という記述が多く生徒から見られたことから、日本と外国の学校生活をクイズ形式で知り、外国籍生徒の言葉を聞いたうえで、どんなことに困るか話し合うことは、生徒たちに興味や切実感をもたせることができ、単元を貫く課題を見出すことができたと考えられる。

仮説2 平坂中のルールブックを作成する際に、生徒が提案した表現を比較してニュアンスの違いを考えることで、場面や状況を考えて表現を選択するだろう。

学級全体の意見交流や抽出生Aの発言、資料7の英文から、have to と must を場面や状況、伝えたい思いの強さによって使い分ける生徒の姿が見られた。「掃除しなければならない」「宿題をしなければならない」など、同じ内容でも have to を使った英文も must を使った英文もどちらも生徒から自然に出たことが、生徒の中で疑問に思う気持ちを強めたと考えられる。別単元でもニュアンスの違いを気にする生徒が増えたことから、場面や状況を考えて表現を選択しようとする意識の高まりが感じられた。

仮説3 外国籍の生徒に実際に伝える場を設定することで、学習を振り返り、次の英語学習につながられるだろう。

ルールブックという形であったため、学級全員とG Cの生徒全員で対面でやり取りをする場は設定することができなかったが、実際に自分たちで表現を考えた英語が相手に伝わったことを実感できたことは、英語学習を続けるうえで大切な要素であったと考えられる。

(2) 研究の課題

本時の生徒のニュアンスの違いに関する気づきを、教師と生徒の英語でのやり取りを通して得られるとさらによかった。また、授業前の英文と授業後の英文だけでなく、変えた意図を学級で共有したり、振り返りにまとめたりするとさらによかった。G Cの生徒へ届ける際に、ルールブックを渡すだけでなく、学級全体でやり取りをしながら渡せると、よりよいコミュニケーションが図ることができた。